

令和7年度 奈良県教育長賞

温かい気持ちで支え合いたい

奈良大学附属高等学校 2年 佐伯 徳真

高校生の私の生活の中で、実際に毎日のように支払う税金に消費税がある。学校の行き帰りに寄ったコンビニエンスストアで、安価な物を買うだけでも、私の微々たる小遣いから容赦なく自動的に支払わされている、唯一身近に感じる税である。

しかし、それと相反して『税』と聞くと、何故か自分にはあまり関係のないもののように感じる。それは、支払うばかりで、自分に直接恩恵がないように感じるからだろう。

そこで、納税する意義は何なのかを知るために、まずは私たちが納めた税は国的一般歳出として何に使われているのかを調べた。すると、『社会保障関係費』、『文教及び科学振興費』、『公共事業関係費』、『経済協力費』などに使われ、そのそれぞれの内訳が多岐にわたっていることが分かった。

例えば、この中で私たち学生に直結している『文教及び科学振興費』は、教科書の無償配布や、全国学力調査の実施、国立大学法人・私立学校の助成、スポーツ振興などのための教育振興助成費、文教施設費、育英事業費、科学技術振興費など、数多くのことに使われている。

ここで私にとって聞きなれた『スポーツ振興』という言葉にハッとした。

私は、幼少期からとても動きが活発で、怪我も頻繁にしてきた。擦り傷や切り傷は毎日のようにしていたが、足や頭の打撲、鼓膜損傷、靭帯損傷、手足の指や手首の骨折も日常茶飯事で、小学校や中学校でも、私の

「失礼します。」

の声だけで、保健室の先生が一瞥もせずに

「また来たん」

とおっしゃる程に、保健室の常連だった。そして、大きな怪我の時は、帰宅後に母が病院に連れて行ってくれ、受付で、母が学校でもらって来た日本スポーツ振興センターの封筒を渡す。すると後日、学校内での怪我の治療費を請求することができるのだ。これは、日本スポーツ振興センターの設立も経費の一部も税金から成り立っているからだ。

自分は税を支払っているだけのよう感じていたが、実はこんなにも身近に、しかも何度も税の恩恵を受けていたのだ。税の意義は、困った人が困った時に支えてもらえ、安心して生活できるためのものであると、自分の実体験を通して実感した。

今、思い返せば、救急車で病院に運んでもらった時も無料だったし、毎日出る家庭ごみも、家の前に出しておくだけで無料で処理してもらっている。普段、無意識に生活している中に、税のおかげで救われていることがたくさんあり、だからお互いに支え合うためにみんなで納税する重要性にも気付いた。

税が人を支え合うことを理解した今、いつものコンビニエンスストアでの支払いが、いつかどこかの誰かに届く募金をする時の温かい気持ちと似た感覚を感じた。